

先人から引き継ぐ技師の魂

構造家・近藤一雄

朝倉幸子◎TH-1

illustration: Taco◎Switch・エンタテインメント

■東畑謙三の思想

東畑建築設計事務所の役員として、構造を仕切る近藤一雄さんには、建築人生のバックボーンが3人いる。

第一に事務所の創業者である東畑謙三。1998年に大往生したこの建築家を挙げなければならない。布野修司さん監修の『待てしばしはないー東畑謙三の光跡』（日刊通信新聞社）からは、カリスマ性ある人物が浮かび上がる。京都帝国大学で学び、「建築は芸術というより工場建築である」と言って、主に公共建築に挑んだ。建築は実務をやらなければ駄目だと、組織事務所を立ち上げたが、「建築家」と呼ばれることを嫌ったという。当時特別顧問の鈴木洋也さんは、「人誑し（ひとたらし）」で「拙速主義者」だったと書いている。

本社の一室に「清林文庫」がある。遺産として残っているのが、美術工芸、絵画、『建築十書』（ウィトルウィウス 著）のイタリア語初版本などの貴重な古書1万5千冊。嬉々として案内してくれる近藤一雄さんは、敬愛する創業者のいる仕事場を天から与えられたのだ。幸せなエンジニアです。

■山田稔教授の教え

高校時代、成績はトップを通した近藤さんなので大学の選択肢はあったが、父の母校であることから神戸大学と決めた。ドイツ帰りの30代で教授になった山田稔先生のゼミに入り、鉄筋コンクリートの構造研究に没頭したという。そのかいあって先生と共著で日本建築学会に発表した論文は、「定軸圧を受ける引率力鉄筋コンクリート単位ラーメンの交番弾塑性変形性状に関する研究 I, II, S, III」などがある。「建物は安全であること、壊さない設計をする」と学んだ。阪神・淡路大震災の翌日に現地入りした時、先生の教えが頭をよぎったと言います。

構造家・近藤一雄さんは、JSCA賞（1997年）を「大阪プール」で受賞。大阪城天守閣平成の大改修などで、組織事務所の本領を発揮した設計で社会に貢献している。大阪市海洋博物館「なにわの海の時空館」はポール・アンドリュウ（フランス人建築家）と組んで設計。英国構造技術者協会から特別賞（2002年）を受けた魅力的な建築物となった。2013年に閉館してしまったのが残念です。

■大きな父の背と引率力

阪神・淡路大震災の1995年にJSCA関西支部の事務局長。その後支部長、副会長を務めてきた。海外研修や、年2回の現場見学会を実施してきた。その流れで今も続く関西建築界有志を束ねての海外視察は27回目にとぼる。

小学五年生まで東京代々木上原育ちだった近藤さん。後に日建設社長になった近藤保氏（76～78年）を父にもつ。東畑入社後、20歳代で大阪駅前再開発の常駐監理者になったのは、父の外圧だったかもしれない。お陰で共同企業体の所長・副所長から、素晴らしいリーダーシップを学んだ。大監理者として父の姿を見てきたこととあわせて、二人から技術者としてのあり方を教えられたと言います。

「1990年に国際花と緑の博覧会では政府苑を担当したが、1970年の大阪万博で同じ日本館を担当したのが父なのです」と誇らしげに言う近藤さんを、霸志堂ジュニアは自分と重ねて見ておりました。

東京から大阪の河内に転校して、「東京弁が通じなくてシャイな子になってしまった」のが、今では想像できません。実は大阪八尾生まれの人を惹きつけて離さない真のパワフルな関西の構造家です。

